第５回復興支援ボランティア
参加者の声（アンケートより）

期間：２０１１年12月２日～12月５日
参加者数：２４名

○今回の活動に参加した感想をお書きください
いろんな人と感想や意見を共有することで、 一人では気づかない事に気づくことができました。
来てくれたことがうれしかったと言っていただけてよかったです。大阪へ帰ったら、みんなに、自分の感じたことを伝えたいです。またいつもの生活に戻ったとき、東北への思いが薄くなってしまうことが怖いですが、ずっと、思い続けられるようにしたいと思います。
七ヶ浜町の人々の話をきいて、それを関西に帰って現状を伝えることもボランティアになるのではないかと思った。
明るくふるまっている地元の人々、良い雰囲気のボランティアさんたちとふれあえて、人間の強さを知ることができました。
1人1人の力は小さいかもしれないけど、それが重なって、継続されていくことで、大きな力になると感じました。
ボランティアを行う時の姿勢は、「何かをしてあげる」と思うのではなく、「ボランティアさせていただく」という姿勢が重要だと思った。
自分は、人に支えてもらって生きているということを感じることができたし、人のこのようなつながりも大切にしていこうと思った。ボランティアによって、成長できたと、自信をもっていえる。
3．11のあの日、ふつうにテレビを見ていた私。「大変そうだなー」としか思ってなかった私。本当に何をしてるんだと、改めて思った。またここへ行きたい。何度も協力をしたい。
お風呂に入ったら、当時のことを思い出す方、夜も眠れない方、海に行きたくない方、震災から9ヶ月たった今でも、苦しんでいると思うと本当に心が痛みました。
実家に戻って現実を見るのが怖いなど、2日間でたくさんの方の話を伺えて、自分の人生をもう一度振り返ろうと思えました。
「今もまだ、思い出の地に行けない。」と言っていたガイドさんを見ていたらどれだけ気持ちを押し込んでいてくやしい思いをしているのか。それでいて、多くのことを私たちに話してくれていることに対し感謝しなければならないと思いました。
現地の状況、人々の心情などをうかがうことができ、これまで考えたことのなかったようなことを、震災が起こって8～9ヶ月も経った今初めて知り、恥ずかしい気持ちとともに後悔の気持ちも強く感じた。
「町一つがなくなる」の一言がすごく心に残った。建物の屋上に上がった時、その言葉を思い出してしまい、悲しみ以上に人の無力さをすごく痛感しました。
がれきの撤去などの肉体労働の活動だけが復興支援ボランティアではないと改めて感じました。
2日間で学んだことを関西に持ち帰って多くの人々に被災地の現状を伝えることが自分を含めて被災地でボランティアをした者の使命であり、責任であると思います。
「やりたいことよりも、必要とされていることを本気でやらせていただく」という気持ちが大切だということを改めて感じました。自分が望んでない作業であっても、地元の方などが望んでいる作業はきっと何らかの形で、復興へとつながると思うので、常に「謙虚」の気持ちを常に持ちつづけ、忘れないようにしようと僕は思いました。
被災地の被害状況（物理的）を見、また現地の方のお話や様子をうかがうことで、震災が自分にとってより身近なものとして感じられるようになりました。悲惨な光景も心に残りましたが、現地の方が時折みせるしぐさや言葉の方がより印象深く、長い間記憶に残りそうな気がしました。
如何に有効に合理的に現地のニーズに答える活動をするかが最も重要であると考えていました。しかし、現地の方は毎日誰かが来てくれるだけで嬉しいと仰っており、確かに毎日参加してくれるボランティアの人が少しずつ減ってきたら「自分達が見捨てられた様に」感じるし、忘れられた様に感じてしまうというのが実感として解りました。

○今後も何らかの復興支援に関する活動を続けたい理由はなんですか？
東北へ来ることができて出会うことができた人たちにまた会いたいし、その人たちがもとの生活に戻るまで何かできたらと思う。
一刻もはやく東北が復興するために役に立てることをしたい。
ボランティアを必要としている。そんな人達に少しでも役に立てるなら参加したいと思いました。皆さんの「ありがとう」の言葉がとても心に響きました。
ボランティアセンターの方々が口をそろえるようにおっしゃっていた現地で動くことだけがボランティアではないという話や被災地の事を思ってくれるだけでもうれしいという話を聞いて何度も現地に足を運ぶことはできないけど自分にできることならぜひしたいと思いました。
滋賀にいてもできることはたくさんあると思うので、継続して何らかの活動をしたいと思います。
復興支援は目に見える支援（機能的なもの）だけではなく、そこに行くことにも大きな意味がある。自分自身も学べることがたくさんある。ぜひまた復興支援に関する活動を続けたい。
常に関心を持ち続けることが大事だと感じたからです。
自分に対し無性に後悔を感じ、それが今後も何かしらの活動をしていきたいと思った。
東北から離れている関西の人々は3月11日を忘れないためにも復興支援に関するボランティアは続けるべきだと思います。
被災者の方々の話が本当にためになる事ばっかりで、とても貴重だったので、自分の世界が広がった様に感じたし、こういった活動に積極的な学生や一般人の話しも興味深かったから。
関西でも復興につながることを、継続的に続けたいと思います。
今回のボランティア活動を通じて、遠い場所で起きたことより自分に身近な問題と考えられるようになったので、できる限りで（範囲で）自分も関わりたいと思います。
続ける事に、復興支援の意義があると思うからです。被災地（現地）に訪れるたびに、「また、行かなくてはならない。」と、心の底から思えるからです。
支援活動は継続的に行ってこそ意味が在ると考えるからです。
○どういった活動をしたいと考えていますか？
現地に何度も足を運ぶのは大変だと思うので自分にできることをコツコツとしていきたいです。
海開きに参加したい。募金をすることができたときは、今日、昨日あった人たちに目的をつたえて、送りたいと思う。自分にできることをしっかり考えたい。
何でもしたい。東北の方のニーズは様々だと思うので。
感じたことを伝えたり、物資を送ったり、募金をしたり、地元でもできる活動をしたいと思います。
また雄勝町、七ヶ浜町のボランティアセンターに行って、同じような活動がしたい。
宮城は来年海開きを予定しているとのことなので、海のＰＲとか、復興支援の良さを伝えたい。
現地で望まれている活動をしたいです。
現地の避難所に伺って、話し相手など、現地の方との交流を深めたいです。
時間があれば、社会人になった時にも何か参加できる機会をとりたいと思います。
小さなことでもいいので復興の手伝いをしたいと考えています。活動の内容はその時々により変わるので、少しでも力になることができればよいと考えています。
何か貢献させていただくことであればなんでもさせていただきたいと思う。
被災地での活動はもちろんのことメンタル面のケアも行えるようなボランティア活動をしたい。
関西発のボランティアバスを継続してほしいです。（特に学生主体）・被災地の子どもたちとふれ合う機会をつくってほしいです。
がれき撤去、仮設住宅でのサロン活動、スポーツふれあい活動
現地の人々が“日常”を取り戻すためのお手伝いをしたいと考える。